6周年を迎えて

２５年近く前、冤罪で逮捕され裁判を闘う中で同じ、冤罪当事者たちとの交流は価値あるものだった。無実を訴える仲間がいることで不安定な心が落ち着き、共に活動することで困難に立ち向かう勇気も湧いてきた。その原動力があって私も無罪を得ることができた。その経験を活かし冤罪で苦しむ方々の手助けをすることで自分の不幸をプラスに変えてきたと思う。しかし無罪の夢はほとんど叶えられず、彼らの心の支えとなる団体が必要だと感じていた。

このような経緯もあって、当会には故桜井昌司さんとの 24 年前からのご縁もあり６年前の立ち上げ時に加わらせていただいた。ここは当事者が主体となる唯一の団体だ。冤罪に挑むには個人の力だけではとても太刀打ちできない。先人たちが助けてくれたように冤罪で苦しむ人たちが力を合わせ一人でも多く冤罪から生還できることを願っている。当会の活動を支えているのは冤罪当事者だけではなく、志を持つ数少ない事務局メンバーを頼りに活動を維持しており、その熱意に私はいつも頭が下がるばかりである。

私たちはメンバー各人が考えを持って冤罪撲滅に取り組んでいる。私も思うところがあって訴訟をするに至った。解雇され復職していた会社を２年前に辞めることにした。部長職の上司が息子と同じ年頃の若い男性社員３名の（陰部を擦るなど）体を触る猥褻行為を公然と行ったからだ。 無実を争う冤罪当事者にとっては誰よりも不法行為は許せないことだが、会社は事実を隠すために今回は上司を守っている。 25 年前に人事部長が「示談していればまだしも」と言って否認する私に暴言を吐き、私をクビにした頃と何も変わっていない。

被疑者になっただけで犯罪者のように扱われ、仕事を失い、生活が困窮し、家庭を壊された人を何人も見てきた。これでは誰も無実を主張できず無罪を争うことができない。社会が警察、検察と一緒になって冤罪犠牲者を追いつめるのではなく、せめて公平な裁判が受けられるよう冤罪に対する世の中の意識を変えて行かなければならない。社会の意識が変わることで裁判官の意識も変わるのではないだろうか。（共同代表 / 矢田部孝司）

6周年を迎えて

桜井昌司さんの冤罪ラジオのお手伝いをしていた関係で声をかけていただき、事務局に加わることに。ちょうどハンセン病家族訴訟が佳境を迎えるころだったので、当事者の必死の声が社会を動かす実感があった。冤罪犠牲者もみんなで声をあげたら社会も変わるかも。そんな淡い期待もあっという間に打ち砕かれた６年間。声をあげられる冤罪犠牲者はひと握り。大多数が怒りはあっても、行動できる余裕もないという現実を突きつけられた。

さて当会は「冤罪犠牲者の会」であって「冤罪被害者の会」ではない。この命名の意味を、発起人である桜井昌司さんから聞いた記憶がない。犠牲者としたのは「犯罪被害者の会」と区別するため、と聞いたような気もするが曖昧だ。しかし「犠牲者」とは言い得て妙だ。冤罪被害者はまさに国家によって世間や「法的安定性」の生贄（いけにえ）とされた犠牲者なのだ。

この犠牲者の血のにじむような訴えに比べ、陥れた警察や検察こそが虚偽と欺瞞に満ち溢れている世界を変えなくてはならない。私たちは生贄の身に甘んじてはならない。犯罪者のレッテルを貼めた警察と検察に投げ返そう。冤罪犠牲者のみなさん、そのために繋がろう。（事務局 / 野島 美香）

冤罪犠牲者の会はこれからは、もっと犠牲者の為に何か出来るといいですね。（共同代表 / 西山美香）

先の国会で２つの危険な悪法が衆議院を通過し、参議院で審議されました。１つはサイバー専制攻撃法案（能動的サイバー防御法案）、そしてもう１つが刑事司法 IT 化法案で、いずれも人権侵害の悪法です。重要な局面を迎えている情勢の下、両法案の廃案・撤回を求め、私は闘い続けます。（事務局 / 堀越明男）

冤罪について思う事は限りなくありますが、何と言っても冤罪犠牲者の恐怖感と絶望感は計り知れません。真実を信じてもらえないと言う事がどれだけの苦しみか。そして冤罪を仕立て上げ良心や罪悪感の欠片も無い人々が、世間では正義の味方に思われてる警察、検察、裁判所である事実が情けないです。（事務局 / 高橋美智子）